

研究ノート

むかしむかしあったとさ —2008年度社会福祉演習Ⅰ教育実践—

小山 聡子

2008年度3年小山ゼミ一同^{*1}

Once Upon a Time

—Educational Practice in “Seminar of Social Welfare”—

Satoko Oyama

Third grade students of Oyama's Seminar^{*1}

2008年度の社会福祉演習Ⅰの教育実践の成果をドミナント・ストーリー探しの「物語づくり」の実験としてまとめた。後期授業で取り上げた対人援助実践における社会構成主義の考え方をベースに、大塚による「物語の体操」及び、正によるドラマケーションの手法が合流したところで可能になった取り組みである。結果、時代の空気を凝縮するような形で、たゆみなく前進、成長することや、身近な家族や仲間との絆を強調すると同時に、変わらず、あるがままでいることの重要性を認識するという、場合によって矛盾するストーリーを抱えていることが描き出され、次なる課題も明らかになった。

キーワード 社会構成主義、ドミナント・ストーリー、ドラマケーション、お話の法則、物語作り

0. はじめに

3年次向けに開講する小山聡子の社会福祉演習Ⅰ（3年ゼミ）では、対人援助の理論と技法について学びつつ、それそのものを近年の思想の流れに位置づけ、批判的に検討するところまで視野を広げることを目指している。また、学んだ理論や方法を実際の生活場面に適用して説明できる「真の理解」を念頭に置くためいくつかの工夫を重ねてきた（小山 2008：199-211）¹⁾。

具体的な内容として前期は、カウンセリング及びマイクロレベルのソーシャルワークの理論と技

法をとりあげ、基礎的な文献の輪読とそれに基づくディスカッション、概念理解のためのエクササイズ（ロールプレイや構成的エンカウンター）を取り入れてきた。

ここ数年後期は、前期に学んだ理論と技法を現代思想の中に位置付け、ソーシャルワークのあり方そのものを考察することを目指している。すなわち前期に学ぶ対人援助の理論が単に個人の直面する不具合を病理ととらえ、環境適応にのみいざなうことを警戒する試みである。利用者の利益を願って取り組む対人援助そのものが、場合によっ

^{*1} 市川迪子・笠原祥子・小林裕美・佐藤優香・清水裕子・舟橋美音・百瀬真由美・渡邊惟子・松永幸

て相手から力を奪い、権力関係をかもし出すこともありうるという矛盾について検討するため、特に社会構成主義にまつわる文献を取り上げ論じてきた。

上記のような状況を踏まえて、小論では後期後半に文献読み込みと合わせて行った教員と学生の教育実践成果の報告を行う。第一に文献を通したナラティブ・アプローチに関する学習内容を概観し、グループで追及した実践の前提ないしは基盤となる考え方を確認する。また、小山（教員）が本ゼミに限らず援助論系の講義や演習に取り入れている文学理論や文学批評の側からのストーリー構築手法について今回の実践にまつわる方法論との関連から説明をし、実践方法のひとつとして位置づける。第二に、本年のゼミで認知面の理解と体感の統合を目指す時の手法として、任意に取り入れたドラマケーションの考え方と方法について説明する。第三にこれらが合流したところで生まれた学生による物語づくりの実験（小山ゼミにおけるドミナント・ストーリー探し）について記し、その内容とそこから読み取れることに関する学生と教員の「語り」を記述する。

1. 方法を構成する3つのアイデア

(1) ドミナント・ストーリー

後期にとりあげた社会構成主義の考え方に基づいて野口は（2002：20-27）、ナラティブには「語り」と「物語」の両方が含まれ、「語り」には語る行為に重点が、一方「物語」には語られたものとしての形式や構造に重点があると述べる。「物語」を「さまざまな出来事や思いをつなぎ合わせてなんらかの結末への向かうお話」と定義づけ、それは「本の中だけでなくいたるところに存在している」とする。一方「語り」は誰かに向かって何かを語ることであるが、その語られた内容をも広く指す。

「語り」と「物語」は相互に連続している。つまり、①「物語」は文字のない時代にはもともと「語り」として伝承されたこと、②個人的な「語り」が文字化されて「物語」になる場合もあること（自伝や自分史など）、③「物語」をベースにそれに沿う形で「語る」といった方向もあることなどを考えると密接不可分な関係といえる。そして、この両者をまとめて指し示すのが「ナラティブ」である。

このように定義づけられる「物語」は現実の組織化、現実の制約といった働きを持っており、その力は通常私達が想像する以上に大きいと言える。「私達は、ある事件をひとつの【物語】として理解できたとき、その事件を理解したと感ずる。【物語】という形式は、現実にはひとつのまとまりを与え、了解可能なものにしてくれる。」というように、物語は「現実を組織化する」働きを持つ。「王が死に、女王が死んだ」というのは荒い筋書きにすぎないが、「王が死に、そして女王が悲しみのあまり死んだ」といえばちゃんとした物語の始まりになる（ガーゲン 2004：104）。これは後述のような物語の持つ因果的連関が腑に落ちる感じを与えるからであろう。

また、「出来上がった物語が事態を理解する際に参照され、引用され、私達の現実理解を一定の方向へと導き、制約する」という「現実制約作用」についても容易に想像することができる。「よく知られている物語や自分のお気に入りの物語をこっそり参照し、それを下敷きにしながら物語的理解をすすめていく」というのはよくあることである。

これらがすなわち支配的な物語（ドミナント・ストーリー）ということになる。ホワイトとエプストンは「物語としての家族」において、「人々には豊かな生きられた経験があって、この経験のある断面だけがストーリーされて表現される、そ

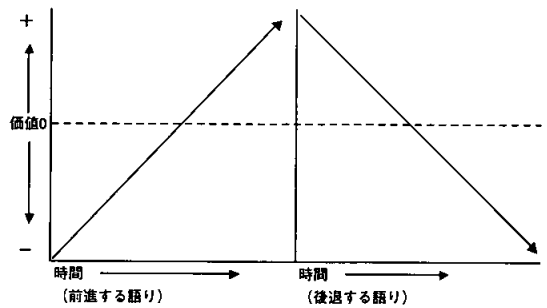
して多くの生きられた経験が必然的に人々の人生や人間関係についてのドミナント・ストーリーの外側に汲み残されることになる」と述べる（ホワイト/エプストン 1992=2002：34-35）。ガーゲンは、「私達は人生や普段の生活を『上昇か下降か』『進歩か後退か』『満足か不満か』などの観点から理解している」と述べた（ガーゲン 2004：105）。これらの言説は、何らかの問題に直面していると認識する個人が、セラピーなどにおいて被援助者の立場として位置づけられる「場」の構造そのものを俯瞰する社会構成主義のものの見方である。こうした観点は、何らかの不具合に直面しているか否かにかかわらず、私達の生活におけるものの捉え方を俯瞰する上でも大いに役立つと考えた。特に最後の学生生活を終え、社会人の世界に足を踏み込むという人生の岐路に立った大学生が、自らを語る物語の構造をみつめ、楽しみながらそれらを語りなおす行程に立ち会いたいと考えた。

(2) 大塚による「物語の体操」

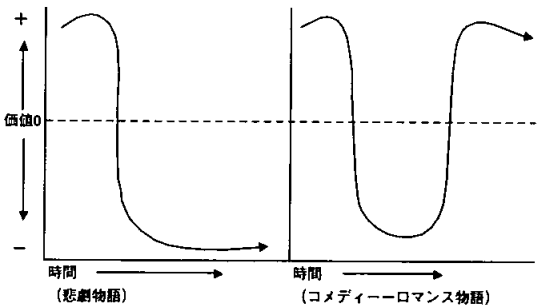
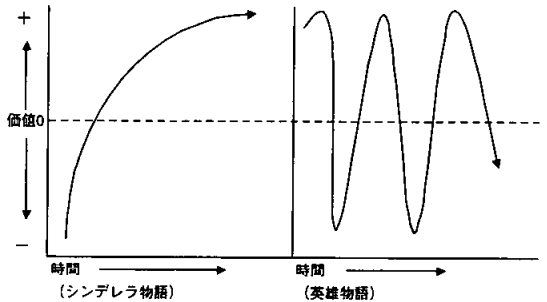
文化人類学のバックグラウンドを持ち、マンガ誌のフリー編集者であり、マンガ原作者、批評家でもある大塚（2003：48）は『物語の体操』において、ストーリーを作る創作と言う作業を、「無から有を作り出す行為であり、その能力は選ばれし作者に特権的なものであるという神話」から解き放つ。同書の中では、大塚自身が手塚治虫の『どろろ』のキャラクターの名前や舞台等物語の表層を取り去った状態で現れた構造を「盗作して」作った80年代後半のマンガ『魍魎戦記摩陀羅（もうりょうせんきまだら）』について記している。大塚は、物語を抽象化していくと表面上の違いが消滅して「同じ」になってしまう水準があり、それを「物語の構造」と呼ぶ（大塚 2003b：57）。さらに、小説といわずコミックといわず「ある時代の優れた作品群が結果として同一の物語構造へ

と向かうことが現実にある」という示唆をする。また、物語には、ある時代における著名な作家が作り出す作品のような大仕掛けなものでなかったとしても、「もっといじましい『プチ構造』みたいなものが常に流行としてあってそうしたツボを抑えられるか否かが案外その時点での小説家の文学的評価を左右しているように思えることがしば

(図1)



語りの基本形



(ケネス・J・ガーゲン著、東村知子訳「あなたへの社会構成主義」ナカニシヤ出版、2004 p106より)

しばある」とも指摘する（大塚 2003b：83）。

大塚の言う「構造」は、適切な語りが満たすべき要素として社会構成主義の立場からガーゲンの上げた次の各点に該当すると考えた（ガーゲン 2004：103-104）。すなわち、①説明されるべき出来事、到達すべきまたは避けるべき事態などといった収束ポイントが設定されていること、②設定された収束ポイントに向かってそれを説明するように出来事が述べられること、③一つの出来事とその前の出来事と因果的に結びついて因果的連関を示していることの3点である。さらにガーゲンは、こうした語りの構造を収束ポイントの位置によって「前進する語り」と「後退する語り」に分け、これらの変形版として「シンデレラ物語」「英雄物語」「悲劇物語」「コメディ・ロマンス物語」を上げている。（図1参照）

本ゼミにおいてめざしたのは、こうした語りの構造を十分に認識した上で、私達の中にある語りのプチ構造を見つけることであった。

(3) ドラマケーション

そもそもゼミメンバーによる物語作りを思いついたのは、演劇的手法を用いてコミュニケーション能力や表現力を高め、人間関係を円滑にする「ドラマケーション」を小山（教員）自身が体験

する機会を得て、その考え方と手法に触発されたためである。ドラマケーションとは、「ドラマ」と「コミュニケーション」の合成語である。80年代以降いくつかの時代背景に呼応する形で演劇教育ないしは演劇による教育が見直されてきた流れの上で、2005年、東放学園高等専修学校に対して文部科学省から委託された事業教育重点支援プランの研究開発がきっかけとなって生まれた。このときの「コミュニケーション能力と表現力を高める演技・演劇による自己啓発プログラム」という研究開発のテーマが、当時すでに同専修学校の授業や特別活動で利用されていた「5分間くらいのドラマワーク」にリンクして発展し、全国各地へのドラマ大使派遣も始まった。これは、演技や遊びの世界のみならず学習を行ううえでも大事な「リラックスし、集中し、仲間を感じる」という三要素を満たす数々のアクティブメニューからなる。ドラマケーションにおける4つのカテゴリーとアクティブメニュー例は以下の通りである（正 2008：30-32）²⁾。（表1参照）

正によるドラマケーションのアクティブメニューの「表現を楽しむ」カテゴリーの1つ「リレー物語作り」では、即興性を大事にすることその他の手法がグループ全体のドミナント・ストーリーを浮き彫りにするのではないかと考えた。このアクティブメニューのねらいは、「全員でひとつの物

(表1)

カテゴリーA	カテゴリーB	カテゴリーC	カテゴリーD
仲良くなる	体を感じる	コミュニケーションを楽しむ	表現を楽しむ
ガッチャン 取るな どっち 仲間集め カウントアップ ジップ・ザップ	背中合わせ その日の気分 カウント・ダウン 聞き耳 主人と従者 集中くずし 花いちもんめ	人間と鏡 室内障害物 エイトカウント おしゃべり仲間 手裏剣合戦 イエスマン・ ノーマン	粘土人形 共同脚本創作 頭どり リレー物語作り 何やってるの ワンタッチ・ オブジェ

語を作ることで、共同作業の楽しさを感じる。」というもので、「意外な物語を楽しむ」「反応する」「考えすぎない」「他人をコントロールしない」が留意点である。方法は4～15人が「むかしむかし」から始まって、最後は「めでたし、めでたし」で終わるよう順にしゃべることで物語を作り上げる。指導のポイントは、「考えないで、思いつく言葉を口に出す」ことを促し、また「失敗を喜ぶ」という感覚である（正 2006：74-77）。

即興性の中に各自の思いが投影される可能性と、また一人で「思考して」作るというよりは、「感覚」を大事にし、また他者をコントロールしないという原則を遵守することによってそこにグループ内のドミナント・ストーリーがかもしだされることの可能性にかけて、ゼミ生によるリレー物語作りに取り組むことにした。

2. 物語作りの実験

(1) お話作りの手順

前述したような考え方、視点を前提として、後期ゼミの中盤を越えたところから今年度のまとめ作業とそのプロダクトに関する投げかけをし、ゼミ生と教員間のディスカッション及び試行錯誤を繰り返して最後に掲載する9作品を作った。作り上げるプロセスについて説明する。

1) ドラマケーションのアクティブメニューの導入（リレーシヨンの深化と自己表現のためのウォーミングアップ）

本ゼミは、前期からカウンセリング理論の学びを通じた演習に取り組み、特に前期後半には國分康孝が提唱する構成的グループエンカウンター（國分/片野 2001）を導入してきたため、グループ内のリレーシヨンはかなり深まっていたと考えられる。しかし、それにもましてここで取り組もうとする物語作りには安心して自分を表現できる

「場」の確保をめざしたウォーミングアップが重要であると考え、ドラマケーションが提唱するアクティブメニューの中からいくつかに取り組むこととした。

具体的には12月に入ってから、水曜日2限に設定されている本ゼミを1限から行うことによって拡大の時間を確保し、その中でまずは以下のメニューに取り組んだ。AからDのカテゴリー中、Aの「仲良くなる」に関してはすでにすんでいるものとし、Bの「からだを感じる（五感の覚醒）」における「まわりを感じて歩く」を回の初めに行った（正 2007：33）。これは、空いているスペースに向かって、互いがぶつからないように歩き、掛け声やアイコンタクトといった明示的サインを一切使わずに皆でびたっと止まるというものである。通常私達がプライベートゾーンとして感じ確保している自分の周り45センチくらいの範囲を、2メートル、3メートル、教室全体へと広げていく活動である。誰も何の指示も出さないというところに全メンバーが対等に互いを気遣い感じあうチームワークも体感することが出来た。

次に、カテゴリーCの「コミュニケーションを楽しむ」にはいる。今回は「おしゃべり仲間」及び「主人と従者」そして「人間と鏡」に取り組んだ（正 2008：34-38）。「おしゃべり仲間」は、3人が横並びにイスに座り、残りの人は向かい合って座る。まず「みんなカエル」とお題を出し、前に出ていた3人が「カエル」になりきって会話をかわす。観客席の1人が一定時間（30秒）で手をたたき、3人のうちはじめの1人が抜ける。次に手をたたいた1人が入り、「みんな大根」のように次のお題を出し会話を続けるということを繰り返す。ねらいは「安心して自分を表現できるのは同族の仲間間でのみ」という昨今の傾向を逆手にとったものであるが、本ゼミにおいては様々なキャラクターを演じることによって、次のリレー

物語につながる「自分の枠はずし」または「日常の枠はずし」（少々ばかげて見えることを言ってもかまわない雰囲気）の効果が感じられた。

「主人と従者」は、まず2人一組になり向かい合う。主人になる者と従者になる者を決め、次に主人になった者が従者になった者の額の前20センチに手をかざす。主人はゆっくりと手を動かし、あちらこちらへ従者を導く。2回目は主人と従者が交代する。このねらいは、リードする者とされる者双方の立場について相手を感じながら味わうというもので、自分の傾向を知ったり、「場」の条件によって変わる感覚を楽しんだりすることができた。（人間と鏡については省略）

2) リレー物語作りの実践

いよいよカテゴリーDの「表現を楽しむ」である。ゼミメンバー9人と教員小山の計10人で輪になって座り、「むかしむかしあったとき」を最初の1人が言う。最後を「めでたしめでたし」とするとハッピーエンドしか想定することができなくなる、ということから最後はもう少しニュートラルなしめのことばとして「とっぴんばらりのぼう」を持ってくることにした。また、ドラマケーションではひとことずつしか言うことを許されないが、今回は各自の自然な流れにまかせて一言から1文まであり得ることとした。「考えすぎないこと（思いつくことをパッと口にする）」「他者をコントロールしないこと」「失敗を楽しむこと」といった原則は板書して各自銘記の上スタートした。また、記録のためにICレコーダーで録音した。結果が以下の物語である。

（リレー物語①）

むかしむかしあったとき。

ある女の子が靴を履いて外に遊びに行きました。外の花を見て、「きれいやなあ」って思って、

いっこつもうかなって、いやあでもここは、かわいいそうだからやめとこかな、と思いとどまりました。でも、だれもないし、とっちゃえ！、一本ピンクの花をとりました。そのピンクの花を、大好きなあの人に贈りました。

そこに1匹のはちが飛んできました。そしたらはちが、女の子に向かっていき、さしちやおうかな、どうしようかな、やっぱりやめとこ。やっぱりさしちやおうかな、「きゃあ、こわ〜い。」はちは笑いました。おんなのこはそれに腹を立てて、ピンクの花を差し出しました。「やるよ。」「ええ？いいんですか？」はちは驚いて、喜んで、「もっかいさしちやおうかな。」おんなのこは、困りました。「なんてはちなんだ、もうあげるものがないよ、どうしよう、もしさされたら、死にそうだしな、こまっちゃうよ、いやまだ生きてやるぞ。」じゃあかみのけについている花びらを1枚あげようかな、と思いました。

そしたらはちがこういいました。「ゆるしてあげるよ。」「いやゆるさない。」女の子はもうすでに怒っていて、はちを無視して歩きました。「なんで無視するんだよ。」とはちがあってきました。「ストーカー？」女の子は携帯で警察に電話をかけ、警察が来ました。

警察は事情を聞いたらはちを山にかえしました。「君ははちなんだから、山で蜜でもすっていなさい。」そういわれた蜂は、「でも最近血をすっていないしな。」「おまえはドラキュラか？」「でも血はおいしいんだよ。」「山へ帰れ。」はちはしょうがなくかんねんして、山へ飛んできました。

女の子は安心して家に帰って、「そういえば何か忘れ物があったなあ。」「なんだっけ、ま、いっか、おなかすいたなあ、何食べよう、あ、そうだ、おかあさんに聞いてみよう。」「おかあさん」「なあにどうしたの？」「きょうのごはんはなに？」「ホットケーキだよ、あま〜い」「からいのほしい。」

「がまんしてよ、うちホットケーキしかないのよ。」
 「わかった楽しみにしとるわ、はやくホットケーキやけないかな、ホットケーキ何かけよう。」と
 考えているとはちのことを思いました。「はちは今なにしてるんだろう、仲直りしてあげようかな④、いや血すうっていったもんな、でもはちみつもってきてくれたらちょうどいいな、よし、なかなありしにいこう。」と決心して女の子ははちのところへいこうとしましたが、ねむくなってきて、昼寝をしてしまいました。

「ちょっと、そろそろおきたら、ホットケーキできたよ、たべちゃうわよ。」とおかあさんがよびにきました。「ダメ食べる、でも眠い。」・・・と、そこへはちが「このはちみつつかう？ なかなありしましょ」⑤。「そしたらはちみつくれる？」「うんあげる。」「いやでも血をすってって・・・、そんな蜂蜜まずいんじゃない。」「うそうそ血なんか吸わない。」「うーんどうだろうね。」、血をイチゴだと思って・・・ホットケーキにかけて食べようかなと思いました。なので、しかたなく女の子ははちみつをもらってホットケーキにかけて食べました⑥。その味は、蜂ががんばって集めたのでとっても濃厚で、鉄の味でした。
 とっぴんばらりのぶう

このリレー物語の構造めいたものを教員が解釈したのが以下のものである。

- ① 主人公が他者とのかかわりを求めて外界に出る。
- ② 他者が現れて要求や駆け引きを経て様々な感情を味わう。
- ③ 主人公は他者とのかかわりに失敗してある意味で傷つき撤退する。
- ④ 安全な場所に引きこもって守られるが、他者とのかかわりに未練もある。
- ⑤ 新たなかかわりに向けて踏み出すか否かを

迷っているところに他者からの呼びかけを経験する。

- ⑥ 他者からの呼びかけを受け入れ、若干の欺きはありつつも、落着する。
 次にもう一遍リレー物語に挑戦した。

(リレー物語②)

むかしむかしあったとき

いぬが、ねこと一緒にあそんでいました。すると鳥が飛んできて、「ねえ遊ぼうよ。」といわれましたが、いぬはねこと遊びたいので、「ことわろうかな、そうしようかな、でもかわいそうかな、でもどうしようかな、いづらいな」。

じゃあそこでねこは、鳥を食べてしまいました。「いやあ！」鳥がいなくなったのでいぬはねこといっしょに遊ぼうとしましたが、するとそこに蛇がやってきて、「あそぼ！」「へえ、おまえとかよ。」「よくも鳥を食べたな。」へびは怒っていました。「さっきのたまごおいしかったのに、もうたまご食べられなくなっちゃうじゃん。」「でもほく、おなかいっぱいなの。」じゃあそういうとへびは、舌うちをして帰っていきました。

するとそのあと、みみずがやってきてこう言いました。「さっき道を歩いていたらね、へびがすごい怒ってたんだけど、どうしたんかな？ほくを踏みつぶしそうだったんだよね、しっぽがちよときれちゃったんだよね、どうしてくれるんだよ。雨でもふらないかな、そしたら助かるな。」とみみずがいうと、いぬがへびといっしょにどうしよう・・・と作戦をはかってみみずを投げました。

と思ったら、いぬがねこに「実は隠しごとが今まであったんだ。」って言いました。するとねこは「なに、それは？」と答えました。「実はみみずとね、ほくはね、実は昔からつきあってたんだ。体がちょっと切れちゃうなんて、ほくはむごいことをしたな、どっちが顔かよくわかんないけ

ど、それでもぼくはみみずを愛しているんだ。」

ねこは切れてつめでひっかこうとしましたが、いぬのしっぽにひっかかってころびました。それでもねこはひっかこうとしましたが、ほんとはいぬがすきだったので、やめました。

するといぬはほんとうのことをいいました。「実はね、みみずよりね、きみのほうがね、好きなかもしれない。」「うれしい。」ねこは泣いて喜びました。

とっぴんばらりのぼう。

2作目に関してはもう少し単純な解釈になった。ひとことで言えば親しい友人または、一組の男女関係とそれをじゃまするもの、そして波乱を経て平穏な二者関係におちつく二人である。2編ともに、対人関係に奮闘しながら落ち着いたはまりどころをみつけようとする彼女達の現状を表しているように感じたが、もちろん別の解釈もありうるだろう。

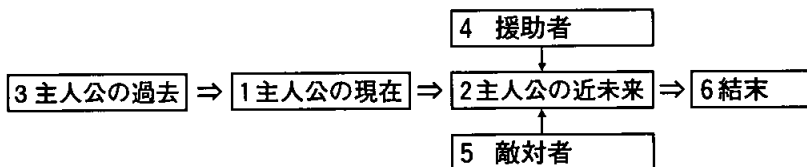
このアクティブメニューの感想をメンバーよりつったところ次のような内容が出された。

- ・ すぐに思いつかない場合、登場人物の会話の一言を言うことが何人か続くと誰の会話かだんだんわからなくなって物語が破綻しやすい。
- ・ どこでやめていいのかわからなくなる。
- ・ メンバーによって「話の流れをひっくり返す」、「優しいセリフを出しがち」など傾向が見られて面白い。

3) 大塚英志による「お話の体操」を利用したプロット設定

その場で出来上がるリレー物語のみでメンバーのドミナント・ストーリーを見つける作業には無理がありそうだと判断し、次なるアイデアを練る過程で大塚によるプロット設定を教員が提案した。メンバーが自由に作れて、かつ破綻のないストーリーをめざすためである。大塚英志は、『物語の体操－みるみる小説が書ける6つのレッスン』において、キーワードを記したカードを無作為に引いて、タロットのように配列することを通してお話のプロットを構成することを提唱している（大塚 2003b：27-44）。

大塚は構造主義のもとになった物語の形態学をベースに登場人物の状態を抽象的に表したものをお話の構成単位とし、任意のキーワードを記載した24枚のカード³⁾を提唱する。これは知恵、生命、信頼、勇気といった言葉である。これらの言葉そのものは大塚が任意に設定したもので、それらの言葉から登場人物の状態を想像できれば良いのであって、選定に必然性はない。これらのカードをシャッフルし、裏返しに6枚選ぶ。これらをタロットのように、1. 主人公の現在、2. 主人公の近い未来、3. 主人公の過去、4. 援助者、5. 敵対者、6. 結末の順で並べる。表にしてキーワードが逆向きに出た場合はそのキーワードの反対の意味を設定する。カードの配列は、記号論を提唱したグレマスの「行為者モデル」に基づき、お話



(図2)

(大塚英志著『物語の体操－みるみる小説が書ける6つのレッスン』朝日文庫、p35より)

を作るのに最低限必要な登場人物とプロセスをワンセットにしたものである。

ここで問題になるのは、ドミナント・ストーリー探しを目指す取り組みにおいて、このようなカードの配列をもとにしたプロットの設定を前提としながらメンバーの中にあるドミナント（少なくともプチドミナント）ストーリーを読み取るとしてよいか否かと言う点である。これに関しては、次のように考えた。各キーワードの配列は、グレマスの行為者モデルでいうところの物語の構造であり、物語上の「文法」のようなものであって、前述の通りゲーゲンによる適切な語りが満たすべき条件すなわち「収束ポイントの設定」「収束ポイントに向かった説明」「因果関係の存在」を満たして破綻のない物語を作る規則のようなものである。さらに、キーワードそのものは抽象的であり、そこにどのような連想も可能である。したがってここで利用することには問題がないとすることにした。

4) 第一回お話作り

小山（教員）が事前に用意した上述のカード24枚をメンバーの代表がシャッフルし、みなの前で1～6まで配置した。それを表にして今回設定されたのは以下の配列である。

これらのキーワードをもとに少し考えて作れる程度のおはなしを作ることをメンバーに課し、2

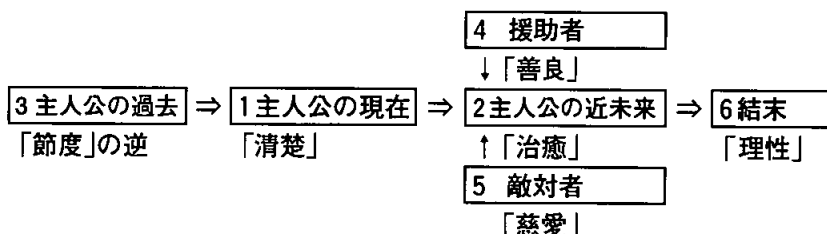
週間程度の期間を置いて、教員あてメールにて添付ファイルで提出願った。

5) 第一回お話①～⑨をランダムに配布した加筆バージョンの作成

初回に提出された物語9編はA4に1枚～3枚程度のものであった。これらを、名前を伏せた上で9人分メモリースティックに入れて配布し、プリントアウトした9編をランダムに全員に配って自分の作品でないことを確認の上、大筋を変えない範囲で若干の加除筆をこころみることを提案した。これは、各メンバーが他者の物語を楽しみ、また特定の他者に遠慮気兼ねすることなく、各自が対等で同等の参加を保障され、かつ責任を担うメンバーとして「グループ全体の物語」を育てるための工夫である。このようにして、よりグループ内のドミナントに近づくことができると考えた。これも2週間程度の時間をおいてメールに添付で提出願った。

6) 加筆バージョンを全員が共有し、発見したドミナント・ストーリー及び一連のプロセスを経て気づいたことを語る。

このようにして出来た加筆バージョン9編をメールに添付して全員に送り、それぞれから次の課題を再度メールにて提出願った。



(図3)

1. 配当された物語の感想（当初の物語の感想のこと）
2. 物語加筆について ① どのようにして行ったか、② 行う過程で何を感じたか
3. 物語に見るドミナント・ストーリー ① どのようなドミナント・ストーリーが見えるか（見えないもあり）、② 各キーワードが何に当たると思うか
4. まとめ

(2) お話

各自が作り、それらをランダムにメンバー内に回してできた加筆バージョンのほうを掲載する。他者の作った物語に手を加えることにはほとんどのメンバーが遠慮がちであったものの、9作品のうち2つ（物語4と物語9）については中付けか後付けかの別はあれ、統一性を保ちつつ新たな物語に生まれ変わっていた。小論の最後に全編を掲載する。タイトルは加筆前の初回バージョンの作者にそれぞれつけてもらい、記名に関してはメンバーの了解を得た。言わずもがなのことではあるが、ここでは物語そのものの巧拙は一切問わない。前述の手順を踏んでどのように皆が参加できるのか、支配的物語について語れるか（気づくかではない）を重視している。（物語の掲載は順不同である。）

3. 「お話」から見たこと

(1) キーワードの「つもり」と「読み解き」

表1は、初回バージョンを作った本人による各キーワードと「状況」の対応である。抽象的なキーワードを作中人物のどんな状況にあてはめるのかということに関して、厳密にはあてはめにやや疑問のあるところもあるが、しかし全体を通して大体キーワードから連想される状況に見るドミ

ナント・ストーリーについて考察することに問題はないと考えられた。

いくつか対応における特徴が見られた。「節度の反対」に関しては大体主人公の行う反倫理的行動ないしは違法行為を示している。物語5は仕立てが少々違い、ストーリー全体を通して表現されるナンセンスさ全体を現す。「清楚」に関しては、多くの人が女性をイメージしており、その中でも外見と内面のどちらを中心に考えるかに違いがある。物語8は主人公個人ではなく、ナースという職業に寄せられるイメージ一般を示している。「善良」というワードの「援助（者）」との結びつきは、主人公に対する許し、共感的理解、代弁、助言など他者からの働きかけを示す場合と、性向の変化、決意といった自分自身の動きを示す場合が半々であった。「慈愛」が物語における「敵対者（障壁）」となる結びつきは一見考えにくいようであるが、本来肯定的な感情を向ける存在である家族や親族の過度な保護や心配といった身近な人との関係におけるジレンマとしてあらわすことがひとつのやり方であった。また、「援助（者）」と同じように自分自身の愛情ややさしさといった性向が事態の障壁となる場合があることも示されていた。「治癒」を「近未来」と結びつけることはストーリーを良い方向へ持って行き、ハッピーエンドに近づけることのイメージがつきやすかった。その流れで「結末」としての「理性」も波乱や事件が収束して、まっとうな価値に落ち着くことが示されていた。

(2) 今そこにあったドミナント・ストーリー

メンバーの最終レポートでは、前述のキーワードとの結びつけ、また作品の共有を通してドミナント・ストーリーと考えられることがいくつか語られた。

- ・ 悪は滅び、正義は勝つ。

(表2) 各キーワードと「状況」の対応 (初回バージョン作成者による)

	過去	現在	援助(者)	敵対者(障壁)	近未来	結末
キーワード	節度の反対	清楚	善良	慈愛	治癒	理性
物語1	ひとつのことにこだわりを持ち度の過ぎたことをする	冷酷ではなく優しい心をもっていること	偏見を持たず、平等に接すること	人、動物、物を愛する心を持つこと	小動物の愛らしさに気づき、嫌いではなくなった	誰が考えても納得するような行動することができること
物語2	中学2年時の素行不良	少年の無心な心と月	殺してしまった先生の母親の許し	両親が子どものことを思って、その記憶を消したこと	少年が、生きることに向き合えるようになったこと	学校にきちんと行き始めた
物語3	好きでもない相手からもみさかいたなく贈り物をもらい、さらに手紙も返さないずぼらさ	美しい姫であること	教えを説く式部の君	恋は盲目の言葉のように、2人の貴公子を愛する気持ち	式部の君が傷心の姫を受け入れ、慰める様子	大福や男に惑わされずに、自分の道を行く決心
物語4	不良からからまれた過去の出来事と、それによってできた門限	彩華の「いいこ」なふるまい	一緒に親を説得してくれる友達とコーチ	親の反対	親の理解を得られたこと	「信頼される」ということは「約束を守る」責任によって生まれる
物語5	強いて言えばストーリー全部(サメと旅、各種の川、自分を食べてしまうことなど)	白くて白くて見えないくらいきれいな出目金	ピンクになったこと	カラスと出目金の恋、パルシャ猫の涙	紫になってしまった感染症から元のピンクに戻ることに、シッポが切れたこと	赤出目金、黒出目金に憧れを抱いていたが、やっぱり白でいいと納得したこと
物語6	節度のない人々の存在	清楚な女の子	アドバイスをくれた少年	ダメな人をダメだと割り切れないやさしさ	今いるホッとできる人たちとの出会い	何事もしっかり考え、受け止めようと思うようになったこと
物語7	わがままだった女の子	物静かな女性を演じている女の子	おばだと思っていた人が母であったこと	おばの愛情が重く苦しい様	傷ついた女の子が幼馴染の青年に救われるさま	新しい人生に一步踏み出そうとする女の子
物語8	ナースが白衣に飽きちゃったこと	「白衣の天使」と呼ばれるナースの存在一般	自分でピンクの白衣を着ようと決断したこと	ピンクの白衣が周囲に認められなかったこと	白衣を自分で作ったものの、結局以前と変わらなくなったこと	マイケルの存在
物語9	麻薬にかかわるバイト	飾り気のないそのままの女の子	わかろうとしてくれてアドバイスしてくれるおばあさん	おばあさんから愛されていた状態がなくなってしまうこと	自分の問題に気づく	前に向かって頑張ること

- ・ ハッピーには恋愛が必須である。
- ・ 家族や身近な人との絆を大切にする。
- ・ 未来は自分次第である。
- ・ 変化して良くなろう。
- ・ 個性を大事にする。
- ・ 他者への憧れはあるが、結局今のまま（あるがまま）でよいのだ。

それぞれの言葉で語られたドミナント・ストーリーの読み取りについて、枝葉をはらい明確化したのが上記の文である。これらを統合し、あえてグループのストーリーとするとどうなるだろうか。

成長せよ。前進せよ。良くなれ。大きくなれ。そのために精一杯の努力をせよ。苦労や波乱はあってもそれぞれを楽しもう。結局良いものは生き、悪いものは滅びるのだから。そんな中でも各自の個性は大切に、無理して違う者になろうとするな。悩みはあっても、あるがままの自分が素晴らしい。そんな自分と支えあえる素敵なお人を見つけ、暖かな家庭を築きたい。

このようにつなげて語ればあまりにまっとうで、かつ陳腐とさえいえるかもしれない「当たり前」のストーリーを前にして、私たちはさらに何を語ればよいのだろうか。ひとつには、それぞれを並立させて眺めた時に直面するある種の矛盾である。これらは別の読み方をするなら、「変われ、でもそのままでいろ。」とも言えるわけであるし、また、成長や変化を推奨されながら、現実には低下したり悪くなったりする状態（例えば老化とか障害とか死とか）も受け入れなければならないからである。私達は各自の持ち味を生かしながら最大限の努力をし、それぞれの立ち位置を見定めて健康に生きていくことを習ってきた。しかし、「変わろうとせよに変わる」そのぎりぎりの限界、境目のようなものを見定め、納得する作業は案外

難しい。成人してまだ間もないゼミのメンバー達は、仕事（探し）においても、恋愛においても、現在含まれる家族との関係変化においても、いずれも不安定な要素に囲まれている。百瀬真由美は、未来に行きたくない感じを物語2の少年の学校に行かない心境に投影できたと語る。

2つ目は、「良い」「悪い」を誰がどうやって決めるのか、また誰にとっての「良い」を語るのかという問題である。これは社会構成主義につきつけられた課題でもある。「勧善懲悪」と「ハッピーエンド」いうタームを出したのは清水裕子である。清水はレポートの「まとめ」で次のように語った。「『勧善懲悪』というテーマがはっきりと分かりやすく出ている物語もあれば、よく読んでみると、埋もれている物語もあったと思う。やはりどんな物語でもこのテーマは常にあるものなのだろうか、と思った。それと、皆物語はハッピーエンドで終わっていた。未来が『理性』なら当然そうなるのであるが、さらにどんでん返しでバッドエンドにはならないものだと思った。例えば、塩狩峠（三浦 1973=2003）⁴⁾の物語では主人公の犠牲で客車が止まる。多くの人が助かった。主人公は信仰をつらぬいたので、主人公にとってはハッピーなのかもしれないが、見方によっては、死んでしまうのだからバッドである。今回、そこまで複雑さを求めていることもあるが、未来（結末）の『理性』をバッドに持っていかなかったのは、皆が心の底で理性といえばハッピーエンドじゃなくては、と思っているからなのだろうか。」清水の言う勧善懲悪は「欠けているものが回復する」という代表的な「物語の法則」（大塚 2003a：192-215）⁵⁾ととらえると、もう少しニュートラルになる。それにしても清水がこの「回復」と「ハッピー」というお定まりに、何となく落ち着かない感じを抱えていることが興味深い。

このこととの関連で、小林裕美と笠原祥子は物

語5（佐藤優香作）と物語8（市川迪子作）の異質性を指摘する。特に物語5に関して「物語とはうまくまとまるもの」「ストーンと落ちるもの」というドミナント・ストーリーが揺さぶられる感覚が指摘されている。佐藤によると、これを作ったときには「ありきたり」ではなく「面白くしたい」という気持ちがあったという。授業でリレー物語を作った時にやったように各自がワンセンテンス（ワンワード）ずつ言ったことを思い出して、自分以外の人だったらどう考えるか、と考えながら作った結果である。これは、ある種の子定調和を避けて、ユニークな運びをしようとした試みであり、上述の清水が行間ににじませた「落ち着かない感じ」に呼応しているとも言えるだろう。こうしたユニークさは、しかし同時に何が正しいかという価値の問題に直面するので、佐藤本人が言うようにストーリー全体が「節度の反対」（自分を食べてしまうなど）となっているのも興味深い。日常私たちが違和感を抱く子定調和の「くささ」とは、おそらく単純な価値の押し付けを嗅ぎ取るところに由来するのだろう。その一方でしっかりした価値（社会正義）に裏打ちされた安定がないと根無し草になる。この両者の間で丁寧な検討と決定をし続けなければならない。

3つ目は、私たちが直面する強い「家族主義」の風潮についてである。身近な人との絆、それを作る代表としての恋人関係、それが発展して形成される「家族」。それらに向けた希求と、同時に強い絆であるゆえの葛藤を同時に経験しつつ、それでも最後はそこに戻っていかうという言説に満ち満ちているのが現在ではないだろうか。それらが大切であり自分も含めて逃れられないことを第一に認めたくえて、あえてネガティブな側面を言明するならば、「家族や身近な信頼できる人がいない人や標準的家族以外の形を追求する人を排斥する可能性」とでも言おうか。私たちになじみの

領域で言うなら、児童福祉における社会的養護について学ぶ時に、どこまでいっても「血を分けた家族」やその人々が構成する「家族」には追いつけない感覚と、それへの疑問等である。

(3) 実践全体を通して

こうした物語づくりを通してドミナント・ストーリーを読み取り、自ら語る作業は次のように表現された。「このように決められた言葉（キーワード）を個々に与えても、導きだされた物語にはそれぞれの『言葉の支配』や『ドミナント・ストーリー』が顕著に現れる。これは無意識に構築している考えを解きほぐす一つの手段になるのではないだろうか。（笠原）」「物語に組み入れ、考えていることや持っていることを書くと、頭の中が整理でき、スッキリすることができた。物語を作ることは思った以上に自分の思っていることや経験などがあらわれていくと思う。（百瀬）」「今回同じお題で物語を作り、同じような登場人物を使うことがあったが、それは女子大だからなのだろうか。（松永）」「物語を紡いでいくという作業は樹形図に似ていると感じた。無数に選択肢があり、その選んだ先にも無数の選択肢がある。この選択を決定付けているのがドミナント・ストーリーのような気がした。（市川）」「言葉や物語の流れを決められると、ドミナント・ストーリーや私たちが持つ言葉のイメージなどがよく現れるのだと感じた。（小林）」

曲がりなりにもドミナント・ストーリーを見つけた私たちは次に何をするか。市川迪子は次のように語った。「ドミナント・ストーリーを見つけ自覚することができても、それに従ってしまい、自分を傷つけてしまったりすることがある。ドミナント・ストーリーを発見する糸口は見つかった。次はどのようにその支配から逃れることができるのか、カウンセリングの場面ではなく、身近な生

活の中でそのような役割を代替してくれるものはないのか、みんなで探してみたいと思った。」前述のように、「後退の語り」を誘導してオルタナティブ・ストーリーを捨象しがちな援助シーン一般への疑問から始まった後期の授業である。このオルタナティブ・ストーリーに光を当てる作業をソーシャルワークの中にどのように位置づけるのか、方法論は何か、これらを問うことが次の課題である。

4. 終わりに

皆の中にあるドミナント・ストーリーを読み解くには、理論的なベースにおいても、それらを適用した方法論においてもさらなる研究が必要であることを痛感させられた。それと同時にこうした領域横断的な教育実践の醍醐味を味わうことも出来た。また、今後の課題が明確になる取り組みでもあったといえる。大塚は、小論で引用した「物語の体操」の文庫版あとがきで次のように語っている（2003b：222）。

— 無論「物語の体操」は順接として読まれてしまうことをあらかじめ想定はしていた。徹底して実用的であろうというのがぼくの本書における第一の立場だ。（中略）その程度には本書のレッスンは実用的だが、そうやって、あなたたち自身が「物語る力」を身につけることが、実はまんがやアニメや映画の形をしていない（時にはしていることもあるが）、「物語」に対する抵抗力となる技術を身につけることにもなるのだ、というぼくの意図については、もはや逆説でなくはっきりと述べておくべきなのかもしれない。「物語」への抵抗力とは、つまり「批評」する力、ということで、その意味で「物語の体操」はじつは「批評の体操」であるともぼくは考えている。（下線小山）

小山（教員）は以前からその教育実践の中で「物語る側」からの技法を逆利用することによって現実を理解したり、援助実践に取り組む力をアップさせたりすることの可能性を感じ、ささやかな適用を試みてきた（小山 2006：103-114）。今回の物語作りの実験においても、自分たちがどのようなストーリー仕立てにからめとられて生きている可能性があるのかということをし少しでも自覚したいという思いがあった。大塚が逆説をわざわざ明言化する中で強調したような「物語に対する抵抗力」を若い学生たちが身につける第一歩となったことを願っている。

最後に、ドラマケーションに触れる機会を下さった正嘉昭氏に感謝申し上げます。2008年の夏前にバリアフリー・アートの会「わーくほけっと」の活動を見学させていただいたことを皮切りに、ところざわ太陽劇団における数回のアクティブメニュー体験、及び映画専門大学院大学におけるドラマケーション公開講座の見学等の機会をいただいたことが今回の実験を考案するきっかけと推進力となりました。記してお礼申し上げたいと思います。

文献

- ガーゲン・J・ケネス著、東村知子訳（2004）『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版。
- 野口裕二（2002）『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ—』医学書院。
- 大塚英志（2003a）『キャラクター小説の作り方』講談社現代新書。
- 大塚英志（2003b）『物語の体操—みるみる小説が書ける6つのレッスン』朝日文庫。
- 小山聡子（2007）『援助論教育と「物語」』『社会福祉』（日本女子大学社会福祉学科）47.103-114。

小山聡子(2008)「恋愛2007－社会福祉演習Ⅰにおける教育実践－」『社会福祉』（日本女子大学社会福祉学科）48,199-221.

正嘉昭他著/渡部淳監修（2006）『ドラマケーション－5分間でできる人間関係づくり』晩成書房.

正嘉昭・園田英樹・小川新次他著/渡部淳監修（2007）『ドラマケーション2』晩成書房.

正嘉昭（2008）「ドラマケーションって何？」『月刊ホームルーム』7, 30-39, 学事出版.

ホワイト・マイケル/エプストン・デビッド著、小森康永訳（1992=2002）『物語としての家族』金剛出版.

註

- 1) 「恋愛2007」においても、社会構成主義の考え方をベースに身近なテーマの1つとしての「恋愛」の中にグループの「当たり前」を探るためのフリートークを行い、分析を試みた。
- 2) ドラマケーションという新たな試みやネーミングに対して、日本演劇教育連盟では当初評判が良くなかった。同連盟は70年の歴史を持って、演劇教育を専門に研究してきた民間団体であり、そうした「専門」の枠からはみだしてあらゆる分野に幅広く活用されるものであるという点が評判の良くない理由だったという。しかし正は、この

「枠をはみだしている」ということを今の教育で大事なことととらえている。正は同じく「演劇を特殊なるものから解放すること」をライフワークとして「飛び入り、飛び出し自由の表現場」ところざわ太陽劇団を主宰している。これらのことは、いわゆる「専門性」というものについて考える時にソーシャルワークの領域が直面しているジレンマと通底するものを感じて興味深い。

正嘉昭（2007）「パネルディスカッション」『ドラマケーション』17

- 3) 24のキーワードは次の通りである。
知恵・生命・信頼・勇気・慈愛・秩序・至誠・創造・厳格・治癒・理性・節度・調和・結合・庇護・清楚・善良・解放・変化・幸運・意思・誓約・寛容・公式
- 4) 三浦綾子（1973=2003）『塩狩峠』新潮文庫。明治末年に北海道の塩狩峠で暴走する列車の前に体を投げ出し、自らの命を犠牲にして乗客の命を救った鉄道職員永野信夫の行為。
- 5) 大塚（2003a）は、お話の「おもしろさ」を2タイプ上げている。ひとつはフィクション、ノンフィクションを問わず、ドキュメンタリー的に読む人の生活のおもしろさというものである。もうひとつは、「欠けているものが回復する」という多くのお話に共通する法則を踏まえたおもしろさである。

物語1 「まちを救った一匹のねこ」

渡邊惟子作、百瀬真由美 加筆

むかしむかしあったとさ。ある国にお城がありました。そこに王様が暮らし、国を統制していました。王様はまちの人々に好かれていました。今の王様の前の王様は動物がとても嫌いで動物が現れたらその場で殺すか他の国に売ってしまえという法律を出していました。その影響で今の王様も動物には抵抗がありました。しかし、とてもきれいな心を持っていたので、殺したり売ったりするのはあまりにもかわいそうだといひ、王様がまちに出る時は必ずベットは家に入れておかなければならないという法律と、野良犬や野良猫などが発生した時は必ず誰かが飼わなければならないという法律がありました。これらの法律によって、人々の家のベットはどんどん増えてゆき、人々にも動物を飼うのに限界がきていました。

ある日、王様が、付き人たちとお城を出てまちへ向かいました。「王様が来るぞー」というまちの人の声で、人々はいつものようにベットを急いで家の中に入れました。

「今日もわたしの国はにぎやかだなあ。いいことだ、いいことだ。」と王様はまちを見渡しなが満足そうに歩いていました。

すると、いきなり王様は「ぎゃあ！何ということだ！！」と叫んで足を止めました。付き人たちはどうしたのかと王様を囲んで辺りを見渡しました。まち角に置かれたバケツの裏に小さな小さな猫が隠れていたのです。付き人たちは慌てて子猫を捕まえ、「みなのもの！この動物を飼う者はいるか？！いたらすぐここに来ておくれ！」と大きな声で叫びました。だが、まちの人々はお互いに顔を見合うだけで誰も名乗りませんでした。王様は硬直して動くことができなくなってしまいました。

「私たち皆、家の中にたくさん猫や犬がいて、もうこれ以上飼う余裕がないのです。どうかこの気持ち分かってください！王様なら私たち国民の気持ちも分かってくれるはずです！！」

若い男の商人が王様に言いました。すると、他の人々も同じようなことを王様に言ってきました。困った付き人たちは、「王様、一度この猫を飼ってみてはいかがでしょう？猫を見捨てることなど王様にはできないでしょう？まちの皆も限界のようです。」と王様を説得し始めました。きれいな心を持つ王様は、「わたしにも見捨てることもできないし、まちに放しておくこともできない。しかたがない。城へ持って帰ろう。」と硬直したまま言い、城へ帰って行きました。

付き人は子猫をメイドに渡し、体を洗うよう命令しました。メイドは動物が大好きだったので、喜んで子猫を抱え、お風呂場へ行きました。王様は落ち着きがなく、子猫のことがきになる様子でした。その様子を見た他のメイドは、「王様、猫は可愛い動物ですよ。お風呂場を覗いてみてはどうでしょう？」と笑いながら言いました。すると王様は、「わたしは動物は嫌いだ。」と言い、どこかへ歩いて行きました。

王様はお風呂場を通ろうとしていました。気になるのか、立ち止まって様子を見ようとしていました。中で、メイドがとても嬉しそうな顔で、体を洗っていました。子猫の体はとてもきれいな白で透き通るような青い目をしていました。王様の気配に気づいたメイドは、「王様、この子を抱いてみませんか？とても大人しくていい子ですよ。」と言い、猫を王様に渡しました。王様は硬直して恐る恐る猫の目を見ました。猫は青い目でじーっと王様を見つめていました。王様と猫はしばらく見つめ合っていました。

翌日、王様は子猫がいる部屋へと向かいました。子猫はクッションの上に座って王様をまた見つめていました。「大人しい子だな・・・。」とつぶやきながら猫に近づいていきました。そしてそっと猫の頭を手でなでました。今まで動物に抵抗があった王様は生まれてからずっと動物にきちんと向き合ったことがなかったので、初めてこの子猫に見つめられ、子猫をなでたことで動物の愛らしさや温かさを知ることになったのです。

日が経つにつれ、王様は猫にだんだん慣れてきたのか、2人で遊ぶ光景が見られるようになりました。「可愛い猫だ。わたしは今までこんな可愛い動物を見放してきたのか・・・。」と反省するかのようにはいきました。そして「よし、これからは国のみなに、野良がいたらこの城で飼うということを伝えに行こう。そして2つの法律を廃止しよう。」と以前では考えられなかった発言をしたのでした。こうして2つの法律がなくなったことによってまちは以前より活気があふれ、王様昔と比べものにならないくらい信頼され代々この国に語り継がれていったのでした。
とっぴんばらりのぶう。

物語2「月が沈む時」

百瀬真由美作、松永幸 加筆

朝7時、いつものように皆が活動を始めるころ、ちょうど僕は眠りに入る。

僕。〇〇〇〇17歳。世間一般では高校2年生ということになるのだろう。しかし半年前から学校には行っていない。なぜ学校に行かないのかと言われてもなんとなくと答えるしかない。勉強がいやだったわけでもない。遊びたいわけでもない。いじめに遭ったわけではない。家庭に問題があったわけでも、おそろくない。そう。ただなんとなく学校に行かなくなったのだ。こうした生活、いわゆるひきこもりの生活を始めたのは学校に行かなくなってから1か月が過ぎたころだ。両親はなぜ学校に行かないのか問いただした。両親の心配は分かっている。しかしなぜ学校に行かなくなったと聞かれても答えに詰まるだけだった。そんなの自分でもよくわからないのだから人に説明できるわけがない。こうして今の生活が始まった。

深夜2時。僕は活動を始める。月に導かれるようにして外に出る。人々が寝静まった夜は僕にとって最高の空間だった。この地球で僕だけしか生きていないような気がしてこのわくわく感がたまらないのである。その日は特別静かな夜だった。毎日行く公園にたどりつくと、そこに人がいた。僕と同じくらいの年の男の子だった。その少年は月の光を受け輝いているように見えた。いつもだったら人がいても目にも留めないのだがその日は吸い込まれるようにしてその少年をみていた。すると少年は僕に気付いて近づいてきた。

「〇〇だよ。俺ずっとここで待っていたんだ。」

そう言って微かな笑みを浮かべた。

「僕もだよ。」

とっさにそう口から出た。でも、でまかせなんかじゃない僕もなんだかずっとこの少年を待っていた気がした。

この少年は××と名乗った。××という名前に聞き覚えはない。でも知っている。僕はこいつを確かに知っている。

「俺はお前の記憶を持っている。それを返しにやってきた。」

「僕の記憶？」

僕の記憶。僕には記憶がない期間がある。14歳の記憶がすっぱり抜けているのだ。両親は一年間だけ記憶がないということを信じてはくれなかった。でもやはり僕の記憶はなくなっていたんだ。そして××が僕の記憶を持っているんだ。

「記憶どうしたら僕に返ってくるの？何で君がもっているの？」

聞きたいことは山ほどあった。でもこの月に照らされた空間では多くを話してはいけない気がした。神聖な場所のように感じられたからだ。

「おまえ、記憶を取り戻したい？」

「うん」間髪をいれずに答えた。

「記憶がどのようなものでも後悔しないか？」

「うん。」

「それならば、記憶を返そう。返すと言っても俺自体が記憶なんだ。」

あたりの電灯が消え、僕らは月の光に包まれた。

××は強い光になり僕の中に入ってきた。

ぐわんぐわんぐわん。

頭の中に記憶が入ってくる。痛くはない。しかし不意に涙がこぼれた。

僕は人を殺した・・・。

気がついたら部屋にいた。どうやって家に辿りついたのかわからないくらい混乱していた。あいつは何でこの記憶を僕に返しに来たんだ。あいつは・・・あいつは何のためにこの記憶を僕に。

僕は中学に入り、平穏無事な生活を送っていた。しかし中学二年生になったとき、周囲の友達にも影響され、たばこに夜遊びカンニングを繰り返した。警察に補導されることもしばしばだった。そんなある日、テストでカンニングしていることがばれた。先生はみんないる教室で僕だけを怒鳴り、カンニング以外のことで僕を罵倒し続けた。

ブチン。

何かが切れた音が自分でも聞こえた。あとは無我夢中だった。筆箱に入っているカッターを持って先生に突進していった。我に帰った時、そこは血の海で僕も先生の血で真っ赤になっていた。

両親は僕に辛い思いをしてほしくないと言った記憶を抹消した。そして住んでいた土地から遠く離れたこの地で何もなかったように再び暮らし始めたのである。

僕は朝を待った。そして両親が起きてきて聞いた。

「ねえ父さん、僕は人を殺したんだね。」

「〇〇なぜそれを・・・。」

「やはり僕は人を殺したんだ。」

頭が真っ白になった。

「なんでなんでそれを今まで黙っていたんだ。何で記憶を取り除いたりなんてしたんだ。確かにこの記憶がなければ僕は・・・。」

両親が僕にしたことをものすごく恥じた。そして許せなかった。

すぐに先生のご家族に謝らなければならないと思い、僕は亡くなった先生の家を訪れた。そこには子供に先を越された先生の母親が一人で暮らしていた。先生の母親は僕を見ると目が一瞬にして凍りついた。

「憎くて憎くてしょうがない。いっそ君を殺してやりたい。」

僕はそれでこの人の気が済むなら死んでもいいと思っていた。先生の母親は話し始めた。

「でも君を殺しても息子は帰ってこない。それより私が殺してやりたいといったとき、君は殺されてもいいと思ったね。」

驚いた。殺してやると襲われるかと思って覚悟していたのに、僕の心境を当ててきたのだ。どうしてこんなことを言うのか理解できなかった。僕は死んで謝ろうとしていたのに。その人はつづけた。

「息子が死んでからは毎日毎日泣き続けたものだ。そうしているうちに涙が乾いて今度は心まで乾いてしまった。生きている気力もなくなった。そのうち何でそうなったかもわからなくなった。息子が殺された悲しみさえ見失って、ただただ生きる気力を失ったんだ。」この人はどうしてそんなことをこの僕に話すのかと問いたくなったが、やめて静かに話を聞き続けた。

「ある夜、お月さまが綺麗でね、外に出てみようと思ったんだ。いつもだったらそんなこと絶対思わないのだけれど月に導かれるように外にでたわ。すると光が近づいてきたの。それはね息子が残した記憶だった。その記憶を見てまた生きようと思ったわ。息子の分まで生きようってね。」

「息子は私のために記憶を残してくれた。あなたの両親が記憶を消したことは本当いけないことだけれど、あなたを守るためにしたことよ。だから恨んではいけないわ。」

「そしてあなたもちゃんと生きるのよ。」

涙が止まらなかった。生きることをもっと真剣に考えようと思った。これからはどう生きていくのか、自分で考え自分の足で歩こうと誓った。僕は前を向いて歩かなくちゃいけない。今日から僕は学校に行く。何か月振りだろうか、こうして家を出るのは。「行ってきます。」と家を出た。

学校への道は、とても懐かしかった。もう半年振りだ。空白の一年を取り戻し、すべてを受け止め、これからを考えていこうとしてこの道を歩くと、以前とは景色が違う。楽しそうに友達と通学する子、駅へ向かいながら仕事の顔になるサラリーマン、慌しく駆けていく大学生、園児を送り届けるお母さんたち。今まであまり他人には関心がなかったが、自分のペースで落ち着いて歩いてみると今まで見えなかったものや、感じなかったことを見つけることができる。僕は周りと一緒にあって、自分のペースで歩くことができているなかったのだ。そんなことを言ったところで、僕が犯してしまったことは到底許されるわけではない。でも、先生のお母さんが僕に気付かせてくれ、与えてくれたものがある。本当に大

切なことは何か、を。

いけないことをしたり、許されるはずのないことをしてしまう人に僕が出会うこともあるだろう。何が起きて、いったん受け止めなければいけない。僕にその強さがあるのか、今はまだ自信がない。でも、過去の過ちを心から悔い、そして改めようとしているのならば、僕は受け止めたいし、恨むばかりにはしたくない。恨むことや、疑うことから開放されるまで、とてつもなく苦しむだろう。けれど、僕は人間の可能性や、心を信じたい。そんなことを考えていると、あっという間に学校だ。友達たちは、半年間のことをどう思っているのか、不安なことはたくさんあるけど、僕にはいつも支え守ってくれている両親、そしてこれからの僕の生き方を見ていてくれるだろう先生のお母さんがいる。僕は、変わった。もう以前の僕じゃない。自分の考えや、信じたことを信じていく。今日が、新たな僕の第一歩だ。さあ、教室へ行こう！

物語3「だいふくの君」

清水裕子作、市川迪子 加筆

むかしむかし平安時代に、あるお姫さまがいました。お姫さまはとても美しく、国中の男の人の憧れの的！だから、数多くの求婚者がいたのでした。

「お姫さま、ぜひぼくと結婚してください。」

「いいや、ぼくと結婚してください！」

男の人たちは、お姫さまに気に入られようと、遠い異国の宝物とか、美しい声で鳴く小鳥とか、きれいな着物とか、素晴らしい贈り物をたくさんするのでした。

多くの人々から美しいと言われ、素晴らしい贈り物を差し出されてお姫さまは悪い気がしません。今日も、左大臣の息子の中将からお姫さまにとって、「実に魅力的な」物が贈られてきました。それは・・・

「まあ！なんておいしそうな大福！！」

そうです。お姫さまは、無類の大福好きなのでした。

「(中将はわかっているわ・・・) いただきます～・・・ちょっと！」

なんとお姫さまがおおきな口を開けて食べようとしたら、取り上げられてしまったのです。

「もう！せっかく大好物の大福をもらったのに、ひどいじゃない。」

「お姫さま、この大福は誰からいただいたものですか？」

「左大臣の息子の中将よ。」

「それでは、中将の君と結婚したいと思うのですか？」

「え・・・イケメンだけど・・・別にそこまで好きじゃないし・・・。」

「だったらその大福は中将の君に返してください。その贈り物である大福を食べるということは、中将の君と結婚します、と意思表示をすることと同じですよ。」

「なによ、もうケチっ！あんたなんが、ただの小間使いのくせに偉そうに！！」

「高貴な身分にあるお姫さまが、そんな言葉遣いをしてはなりません・・・だいたい・・・。」

あらあら、お説教がはじまってしまいました。

そうです。このお姫さまに説教している人物は、お姫さまがあまりに多くの人から贈り物を受け取ってしまうのを見かねて、お姫さまのお父さまが、呼び寄せた教育系の式部の君なのでした。

以前のお姫さまは、いろんな人から贈られてくる贈り物を全て受け取っていました。その贈り物はどれも見事な品ばかり。年頃のお姫さまにとっては、無理からぬことでした。

でも、あまりに贈ってくる人が多すぎて、ひとりひとりに手紙のお返事をする事ができません。お姫さまはもともとめどくさがりだったこともあり、返事をしませんでした。

そうすると、お姫さまに求婚した人々は「どうしたんだろう？お姫さまはぼくと結婚してくれるのかな？」と疑問に思い、悪い噂が流れ始めたのでした。

そうなると困ってしまうのは、お姫さまのお父様です。

「ああ、困った困った。今までは姫の自由にさせていたが、我が右大臣家の悪い噂が流れるのはかなわん。

そうだ！気の利いた教育係をつけて姫のやつを少し黙らせよう！」

という訳で、非常に優秀な学者の娘・式部の君をお姫さまの教育係にしたのでした。

「よろしいですか？殿方から贈り物をいただくのは結構なことです。

しかし、いちばん愛する人以外からいただいではなりません。」

「・・・いいじゃない、ただ今回は、とらやの大福だったってだけよ・・・。それに愛する人はひとりでなくてはいけないの？」

「そ、それは・・・。普通はそういうものなのです。愛する人が複数いるなんてことは考えられないことですよ。」

「そんなこと、誰が決めたのよ！！そうしなきゃいけないって思ってもそうはいかないことだってあるわ。」

お姫さまはすねて、寢室に引きこもってしまいました。

「なによ、もう・・・あんなやつ、嫌いだよ・・・。」

そう愚痴をこぼすと、とても綺麗な薄様に書かれた手紙を眺めはじめました。

「親王さまも右大将さまも二人とも素敵・・・他の人たちは、私が右大臣の娘だから求婚してくれけど、この人たちは本当のわたしを見てくれている感じがする・・・それに、いつも大福くれるし・・・。

どちらもイケメンだし、ああ・・・この方たちのうち一人になんて絞れない・・・。」

悩める年頃です。確かに二人ともお姫さまに愛情あふれる手紙を送ってくるのです。

四季の花々を愛でる手紙、野分の時には身を案じる手紙をくれました。他の人はただ結婚してくれ！という手紙でしたが、この二人はお姫さまの事を本当に思ってくれているようでした。

「はあ・・・どうしたらいいのかしら。一夫多妻制はあるのに、なんで一妻多夫制はないのかしら。まあきっと生物が生存していくために効率が悪いからよね、男性は赤ちゃん産めないし。でも、人間の世界だけ逆があったっていいじゃない。とりあえず、大福もらいながら、うちの国が一妻多夫制を導入できないか、お父さまにお話してこよーっと。」

お姫さまは、お父さまのところへ行きました。

「お父さ・・・はっ！（いやだわ、お客さまだわ。）」

どうやらお父さまの所にはお客様が来ているようでした。暗くて様子がわかりません。そーっと覗いてみると・・・

「・・・どうぞお願いします・・・左大臣はもうじじいです。じきに引退するでしょう。我が右大将家と右大臣家が親戚関係になれば、我らで高い位を独占できます！」

「いやいや、私こそ姫君にふさわしい相手。今の東宮が帝になってしまえば、次の東宮になるのはこの私です。そうしたらお宅の姫君は東宮妃！ゆくゆくは右大臣殿が帝の外戚になれるのですぞ！」

なんと！！お客様はお姫さまがいいな、と思っていた右大将と親王さまではないですか！！お姫さまはつい叫んでしまいました。

「ひどい！！結局お二方とも位が目当てだったのね！私の事を思って書いてくれた手紙は皆嘘だったのね！！」

「お姫さま！？そこにいらしたのですか！？」

「この不安なご時勢、高い位についてないとやってられませんぞ！」

「そうそう。だいたい、ああいう手紙を送るのは貴族として当然の嗜み。どうせ建前・・・おっと、つい本音が！！」

なんということでしょう。結局はこの二人も高い位が欲しかっただけなのです。

お姫さまは取り乱して、泣きながら、部屋から出ていきました。

「お前たち！よくも姫を泣かしてくれたな！！腹黒い人たちに姫はやらん！！」

右大臣は怒って、右大将と親王さまを追い出したのでした。

「うっ・・・うっ・・・皆ひどい。どうせ男の人なんか口ばかり・・・。」

「ええ、ええ・・・。」

傷心のお姫さまは式部に頭を撫でられながら、慰められています。

「・・・結局、私に言い寄ってきた人たちは皆、家の高い位とお金が欲しかっただけなんだわ・・・。本当の私なんか見てないのよ・・・。男女に本当の愛なんか存在しないんだわ。」

「よしよし。大丈夫ですよ・・・お姫さま。この式部はちゃあんと、お姫さまの良い所を存じております。大福につられるところも・・・怒りっほいところも・・・。」

「式部まで私の悪口を言うのね！」

お姫さまは涙をぬくいながら、式部をにらみつけました。

「いいえ。悪口ではありません。あなたが大福につられるのは、自分に正直だからです。あなたが好きなものを好き、という気持ちです。あなたが怒りっほいのも、自分に正直だからです。あなたが正しいと思ったことをつらぬこうとするのです。よろしいですか？これからも自分に正直にありなさい。ただし、己の欲求に目をくらませてはなりません。想像力を働かせるのですよ。この大福の裏には何があるだろう？と。それに、自分の本当の気持ちにも常に敏感でいなくてはなりません。2人のことが気になる就先ほどおっしゃってありましたが、人間そんなにいっぺんに誰かのことを考えるということは難しいものです。たとえ、一時そう思えたとしても、その気持ちが続いていくことはないでしょう。それに、お姫さまはどちらのお方のことも本当に愛していられなかったのでは？？自分の表面的な気持ちに踊

らされて、本当の気持ちに気づかないようでは、幸せは訪れませんよ。」

「わかったわ！私、これからは、男の人に依存しないで生きるわ！！それにたった一人の運命の人を見つけよう！！」

お姫さまは立ち上がりました。お姫さまは大福に目がくらんでいた頃の弱々しいお姫さまではありません。

こうして、お姫さまは自立した女性となり、女官として内裏に上がり出世したのでした。その後、女性としての幸せも手にしたのでした。

とっぴんぱらりのぼう

物語4「ある家族のお話」

舟橋美音作、笠原祥子 加筆

あるところに女の子がいました。

女の子の両親は、華のように可憐な女の子に育てて欲しいと思い、彩華(あやか)という名前を女の子につけました。

彩華は両親に大切に育てられ、両親の思い描いていたような優しく清楚な女の子に育ちました。そんな彩華には1歳年下の妹がいました。名前を光華(みつか)と言い、彩華と同じように光り輝く素敵な女の子に育てて欲しいと両親が付けました。しかし、両親の期待通りに育った姉といつも比較され、光華は次第に言うことをきかないわがままな女の子になっていきました。そんなわがままな光華に対して両親はきつくあたっていたのですが、彩華は変わらずに優しく接し、そんな姉を素直に受け入れられない光華はわざと彩華を避けるようになっていました。

高校生になった姉・彩華はテニス部に入りましたが、家の門限が6時だったのでいつも部活を早退していました。門限は他の子に比べたら厳しいものでしたが、彩華は自分のせいでできた門限だからしかたない、と諦めていました。というのも、去年の夏に彩華は部活だとウソを付いて夜遅くまで友達と遊び、不良にからまれて危険な目にあったのです。その事件以来、彩華の両親は門限を6時に決めてしまい、門限を破ると厳しく叱られました。

しかし、この話には裏があり、それは周りからいつもちやほやされ可愛がられていた姉を疎ましく思っていた妹・光華が不良仲間をけしかけ、姉を危険な目にあわせたのでした。この事件を起こした後、光華は姉に成り代わったかのように優しい振る舞いをするようになり、両親は期待していた彩華から光華を可愛がるようになったのでした。清楚に振る舞えば振る舞うほど優しくしてくれる両親、何を言っても理解してもらえなくなった姉、光華は立場が逆転したことに少しの優越を感じていたのです。

幸い、部活の仲間や先生は彩華の家のことをよく理解してくれていて、部活を早退することを許してくれていました。

彩華は「いい友達に恵まれたなあ。いい部活を続けていられるのだから、贅沢は言っちゃだめだ。」
「どんなに頼んだところで信頼を失った私の話をお父さんもお母さんも聴いてはくれない。」と門限をこれからもずっと守って行こうと思っていました。つらい出来事が起きてもくじけない、周りから愛され

る、そんな姉の姿を見つめながら、光華は妬みと羨望、ふたつの思いに駆られていたのです。ところが、彩華にとってどうしてもその考えを変えたくなる出来事が起きました。

なんとコーチが次の試合の選手に彩華を選んだのです。その試合は出場するのさえ難しいと言われていて、彩華の憧れの先輩が出た試合でした。彩華はどうしても試合に出たくまりました。しかし、試合に出るためには今より練習しなくてはなりません。すると今のように部活を早退することは難しく、そうなれば門限を破ることになってしまいます。

「両親の言い付けは守りたい。でも試合にも出たい。どうしたらいいんだろう？」

せっかく選ばれた代表の座。選ばれなかったテニス部の仲間のためにもみんなに認められる試合をしたい、と彩華はひとり悩んでいました。そんな姿を見ていた光華は思いました。「自分のせいでお姉ちゃんは大変な試合に出られなくなってしまった」「自分が良い思いをすることばかり考えてしまった」と。自分がどんな姿でも変わらずに接してくれた姉。そんな姉を疎ましいとしか思えず、拒絶していた自分。今になって光華は彩華にした行為の重さを知ったのです。一方彩華は友達に相談すると、友達と一緒に彩華の家に行って両親を説得してくれると言いました。さっそく明日一緒に説得しに行く約束をして、彩華は家に帰りました。明日両親に交渉することを考えると、落ち着かずなかなか眠れませんでした。

「お姉ちゃん、眠れないの？」

「光華。久しぶりだね、あなたから私に話しかけてくれるなんて。うん、そうなの。明日お父さんとお母さんを説得しようと思うと緊張しちゃって。私のこと、信用してくれてないから…。」

「…そ、そんなことない！お姉ちゃんがお父さんたちとの約束を守るうと頑張っていたことは傍で見ていた私が知ってる！…元はと言えば全部私のせいなんだもん…。」

「どういうこと？」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。私、ずっとお父さんたちに可愛がられてたお姉ちゃんが羨ましかった。優しくされても無視してた。お姉ちゃんが不良にからまれたの、あれは私がやってって友達をけしかけたからなの。だから全部私が悪いの！！」

「そうだったんだ…。やっと本当の気持ちを打ち明けてくれたね。光華が私にやったことは許せないことだよ。でも、そんな苦しい思いにさせていたのは私のせい。お互いにこれからは全部話せる姉妹になるう？」

「お姉ちゃん、ありがとう。」

ふたりは初めて心からお互いを思いやる気持ちを持ったのです。

翌日、待ち合わせに現れた友達是一人ではありません。一緒にコーチを連れてきてくれていたのです。コーチは「彩華さんの普段の頑張りと、素晴らしい能力を持っていることを、私も一緒に説得しますよ。」と笑顔で話してくれました。彩華はとても力強い気持ちになり、自分の家に二人を招き入れました。

彩華、友達、コーチの3人は彩華の両親を必死で説得しました。彩華がどれだけテニスの練習を頑張っているのか、どれだけ部員の期待に応えようとしているのか、そしてどれだけ才能を持っているのか、たくさんの思いを両親にぶつけました。最初は頑なに門限を破るのは許さないとっていた彩華の

両親も、少しずつ3人の説得に耳を傾け、最終的には試合が終わるまでなら門限をなくすことを約束してくれました。彩華はとても嬉しかったけれど、素直に喜べずにいました。

両親の言い付けを守れないことが申し訳なかったのです。

「お父さん、お母さん、試合のことを許してくれてすごく嬉しい。でも、家族の決まりを守れなくてすごく悲しい。私はそれくらい家族のことを大切に思ってるんだよ。」

彩華は今の素直な気持ちを両親にぶつけました。そして両親を説得する様子をじっと見守っていた光華に対しても言いました。

「あと、光華の本当の気持ちも聴いて欲しい。今までたくさんのことを我慢してきたのは光華なんだよ。」

彩華の言葉に後押しされたように、光華は涙をためながら、自分が姉にひどいことをしたこと、いつも姉と比べられてつらかったこと、もっと本当の自分を見てほしいことをすべて両親に打ち明けました。するとお父さんが「彩華、おまえは部活も家族もどちらも同じくらい大切なんだろう。家族以外でそれだけ大切なものができたのは素晴らしいことだよ。」「そして光華、おまえのやったことは許されない。父さんはその事実を許すことはできない。でもそんな寂しい思いにさせたのは父さんと母さんだ。すまなかった。」お母さんも「私が心配していたよりも、彩華は自分の意思を持ってしっかりしていたのね。自分が夢中になるものがあることで、家族に申し訳ないと思う必要はないのよ。」「いつも光華には二言目には『お姉ちゃんを見習いなさい』ばかり言っていたわね。それがあなたを苦しめていたのね。これからはお互いを思いあっている関係をつくっていきましょう。」と彩華と光華に優しい声をかけてくれました。

彩華にはもう迷いはありませんでした。そして光華の心もくすぶっていた思いがなくなっていくのを感じていたのです。

次の日から彩華の忙しい日々は始まりました。彩華は、自分がやりたいことで両親に心配をかけないため、普段の生活や振る舞いをしっかりして、両親に信頼してもらうよう心がけました。そして光華も、そんな姉の姿を見つめ、勉強をして来年の高校受験に向けて計画をしっかり立て、ぶれない自分になれるように心がけました。今まで以上に部活が楽しく思えるようになった彩華は、来月の試合に向けて今日も厳しい練習をし、今まで以上に近づいた姉妹はお互いを思いやって支え合っていくのでした。

「お姉ちゃん、試合に勝たなかったら許さないよ！」

「分かってるって。もちろん、光華もしっかり勉強しなさいよ！」

「もちろん！」

おしまい。

物語5「出目金の不思議で奇妙な旅」

佐藤優香作、舟橋美音 加筆

むかしむかしあったとき

あるところにとんでもなく、白くて、白くて見えないくらい、綺麗な出目金がありました。でも、でも、その白すぎる出目金は、赤出目金くんと黒出目金くんと金出目金様にあこがれて、水槽から逃げて旅に出ました。サメと一緒に。白出目金は、あこがれの、三人に会うために、ナイアガラの滝をのぼり、ナイル川を渡り遊びました。ガンジス川で、踊りました。白出目金は、旅の途中、鮭に会いました。すると、すると、鮭の卵を食べると憧れている、三人の、どれかに、なれると聞き、信濃川の、鮭を全部食べました。すると、ピンクになりました。ピンクになって、調子にのって、歌って、いると、変なおやじに、誘拐されました。目覚めると、はく製に、されそう、でした。ピンクを、大好きなベルシャ猫が、よだれを、たらし、嬉しそうに、自分を見ていた。食べられた。「おいしい。」しかし、「そんな簡単に死なないぞ。」とかいって、出てきました。ベルシャ猫は、満足して、泣きました。しかし、猫の、友達のカラスが、ピンク出目金に、恋をしました。ピンク出目金とカラスは、同棲しました。でも、ピンクに、飽きて、離婚しました。10年後、ピンク出目金は、太りすぎて紫になりました。それは、出目金の、有名な、感染症だった。紫出目金は、神に、祈った。「アーメン。」「南無大師遍照金剛。」「南無阿弥陀仏。」すると、苦しくなって、眠くなって、お腹がすいて、自分を、食べた。「バクリ。」「メリメリメリ。」すると、元のピンクに戻った。しかし、しっぽが、切れた。「イタイ。」「死ぬ。」「さようなら。」そして、300年後、ピンク出目金は、生きていた。サメは、水族館にいた。実は、ホントは、ピンク出目金は、サメの、子どもだった。ピンク出目金は、遊んでいた。懲りずに、黒に憧れて、イカとタコと遊んだ。しかし、しかし、「こんな人生じゃ嫌だ。」泣いて、考えた。いや、「白でいいや。」「やっぱ白が一番じゃ。」我慢して、我慢して、ピンク出目金は、白に戻った。

サメは水族館にいた。ともだちはひとりもいなかった。サメはともだちがほしかった。

「こんにちはヒラメさん。あのさ、あのさ、ほくとともだちになってくれない？」

「いやだよ、サメ君とともだちになったら、食べられちゃいそうなもの。」

「こんにちはクジラさん。あのさ、あのさ、ほくとともだちになってくれない？」

「いやだ、クジラがサメと友達だなんて、笑いものにされてしまう。」

みんなはサメが怖いのでともだちになってくれませんでした。そこでサメは、古くからの友人のカメに相談しました。

「ほくの顔が怖いから、みんなともだちになってくれないんだ。みんなほくの見た目ばかりで中身をみてくれない。ほくは怖いことなんてしないのに…。」

するとカメは、笑いながら言った。

「昔の君も自分の見た目ばかり気にしていた。ピンクになったり、紫になったこともあったのう。」

サメは恥ずかしくなった。それからサメは、なるべく優しくいいサメに見えるように努めた。ある夜、水槽の水が漏れだした。

「大変だ！水槽の水が漏れている！」

「係員さんはみんな帰ってしまったし、このままじゃみんな干上がっちゃうよ。」

みんなはパニックになった。サメはひらめいた。

「体の大きいほくが隣の水槽までの橋になってあげる。みんなはほくの上を渡って逃げて。」

みんなは慌ててサメの背中を渡り、無事に隣の水槽に逃げる事ができた。

「サメくんありがとう！」

「サメくんがこんなに優しいなんて、知らなかった！」

魚たちは口々にサメを褒めたたえた。次の朝、水族館にやってきた係員は水槽の水がないことにびっくり。でも、もっとびっくりしたのは、サメの協力でみんなが無事だったということだった。

係員は「水族館でいちばん勇気があり優しい魚」というプレートをサメの水槽に貼りだし、サメは魚たちにも、水族館を訪れる子供たちにも人気者になった。

とっぴんばらりのぼう。

物語6「学び、そして未来へ」

松永幸作、清水裕子 加筆

あるところに、女の子がいました。女の子は、いつも身だしなみをきちっとして、誰からも話しかけやすく、みんなと仲良しで、真っ白な小花のような子でした。女の子はいつも微笑んでいて、一緒にいる人たちもいつも幸せそうに微笑んでいます。

しかし、そんな彼女にも、あまりよい記憶ではない過去がありました。彼女の周りには、節度を知らない、わがままで、自分勝手な人が何人かいました。彼らは彼女が何も言わないのをいいことに、ある時は、使い走りをもじりました。またある時は、彼女の清純さを妬んであらぬ事実を作り上げ、嘲笑の対象としました。(自分で行けるのに・・・いいわ。みんな私のことを頼りにしてくれているんだから。)(わたしを笑うことで、あの人たちの気が楽になるのだったら、それでいいの。)

彼女は、その人たちを苦手だと感じつつ、理解しよう、きっとどこかいいところがあるのだと思っていました。(きっとあの人たちも疲れているんだわ。私がそれを受け止めてあげればいい。私が我慢すればいいの。)

そしていつしか、彼女もその人たちの自分勝手さが通るものなのだと、慣れてしまいました。

それから、今住んでいるところへやって来て、友達になった人と以前近くにいたわがままの人たちのことを話しました。すると、友達は

「その人たちはいけない人たちだね。でも、君も君で、信じたりする前にちゃんと考えられる全てのことを考えたの？疑うことが多くて、でもそれを踏まえたくらうで信じるなら、信じてあげなよ。」

と言いました。また、ダメな人はダメってわりきりなよ。とも言いました。

女の子は、今まですべてを鵜呑みにしてただただ信じようとしていたので、ちゃんと考えなければいけないと受け止めつつ、ダメな人をダメだと割り切ることの難しさに悩んでいました。でも、これからはやはり、一緒にいてほっとすることができる、癒してくれる人たちと一緒にいたいと思うのでした。

だから、何事もよく考えてから、信じていいのが、この人とはどのように過ごしていくことがいいのか

が決めようと思いました。もし嫌なことがあったとしても、そのことをしっかり受け止めてから、新しい一歩を踏み出していこうと思いました。

その後、春の野原で女の子は優しい男の子に出会いました。彼は、とても優しいのだけど、その優しさが、やはり女の子と同じように彼を苦しめていたのです。女の子は言いました。

「好きなものは好き、嫌なものは嫌って言っているんだよ。大丈夫。私もそう、言われたんだよ。」女の子のこの言葉を聞いて、男の子は涙を流しました。女の子は大丈夫、大丈夫、とそれ以外は何も言わずに男の子の背中を撫でてあげました。

そこを、女の子の友達が、木の陰から微笑みながら見守っていました。「優しさがどんどんつながっていくね。」

こうして、優しい女の子と男の子はいつまでも幸せに暮らしましたとき。とっぴんばらりのふう。

物語7「過ちとそのわけ」

笠原祥子作、渡邊惟子 加筆

むかしむかしあったとき。ひとりの女の子が母親を亡くし、父親と2人で暮らしていました。父親は大変なお金持ちで、一人娘の女の子は甘やかされて育ち、大層わがままな性格になっていました。そんな性格で幼なじみの男の子も巻き込んでいたずらを度々繰り返していました。ある日、男の子を連れて家の倉に忍び込み、いたずらを仕掛けようとしていたとき、古いアルバムを見つけました。その中身には自分の母親とは別の女の人と移っている父親と赤ん坊の姿が…。ショックを隠しきれない少女は、真実を父親に聞くことができないまま、年月が過ぎていきました。

数年後…。アルバムを見つけて以来、わがママが鳴りを潜め、少女はおとなしく上品な女性に変わっていました。しかし、それは隠しているだけの話。彼女はいつか父親に自分の本当の母親について聴かなければならないと考え、良い子を演じているだけなのです。あるとき、女の子が通う大学で、自分の過去を知るという青年に出会いました。「君の本当の母親は僕の母さんなんだよ。」そう言う青年の言葉に驚くも、真実を正直に話す青年を信じようと女の子は思います。彼に連れられて彼の家に行くと、いきなり部屋の中に閉じ込められてしまいました。「何するの!?」「俺の母親がおまえの母親なんて嘘に決まってるだろ。おまえは俺の両親を殺した男の娘だからな。今度はおまえが苦しむ姿を親父に見せてやるよ。」その言葉に驚く女の子。女の子の父親はお金持ちの裏で次々と中小企業をつぶしていたのです。この青年の両親もその被害にあっていたのです。「父さんはひどいことをしていた人だったのね…。」父親の罪を知り、ますます自分の出生の真実を知らなければならぬと考える女の子。青年は女の子の父親に身代金の用意をさせようと一度家から出ていきました。その時、同じ大学で彼女が見知らぬ男についていったことを知った幼なじみの青年が助けに来たのです。「大丈夫か!? 逃げるぞ!!」二人でその青年の家から脱出したのです。

母親のこと、父親の真実、さまざまな問題が女の子を苦しめていきます。そこに女の子が捕まったことを知り、心配になって駆けつけてきた叔母と名乗る母親の妹がやってきます。そこで彼女から思いも

よらない真実が！

「あなたの本当の母親は私なのよ。」

そこで聞かされた内容は、死んだ母親は身体が弱く子どもができなかったこと、父親が妹に手を出したことを知っていてそれでも子どもが欲しいと妹に頼んだことでした。「あなたの母親は二人いるの。それだけは分かって欲しいの。私があなたを産んだことは本当だけれど、死んだ姉さんもあなたのことを愛していたのよ。」

死んだ母親と目の前に現れた生みの母親、そして様々な悪行を働いていた父親。多くの真実を知ったことで自身の人生には悲しみと苦しみしかないのか、と絶望を感じた女の子のそばですべてを見届けていた幼なじみの青年が女の子にこう言いました。「つらいこと、苦しいことはいつか君の力になるんだ。あのころ、わがままだったのも本当の自分を見て欲しいと思っていたからだろ？僕と一緒に君を支えていくよ。」その言葉に励まされ、女の子は新たに自分の道を見つけていくことを強く心に誓います。

「私は私の人生を生きていくんだ！」

そして、自分の生きる道を自身で確立した彼女は、2人の母親のこと、父親のこと全てを受け入れよう、そして自分の気持ちも伝えて分かってもらおうと心に決めました。父親の悪行で怖い思いをしたことを父親に言い、彼女を含め、たくさんの人をどれだけ傷つけてきたかを分かってもらいました。そして、母親に関しては、産みの母親でも育ての母親でも、愛されたことを感謝し、これからも産みの母親（叔母）とも仲良くしていきたいと素直に伝えました。父親も叔母も涙が止まりませんでした。しかし、このひと時は、親子の絆を最も深めることができた時でした。

それからというもの、彼女は、幼馴染みの青年とお付き合いをし、お互いに支えあう仲になりました。そして彼女は自分を偽ることなくありのままの彼女として自分の道を歩んでいきましたとさ。とっぴんばらりのぶう。

物語8「白衣に飽きちゃった、ピンクが好きな大人気ない看護婦さんのお話」市川迪子作、小林裕美 加筆

むかしむかしあったとさ。

山奥の谷に小さな村がありました。村の長い坂を登ったところに病院がありました。その病院は小さいけれど、隅々まで掃除が行き届いた綺麗な病院でした。金魚と亀も飼われていました。その村の病院に一人の看護婦さんがいました。その看護婦さんはいつも白衣を着ていました。看護婦さんずっと前からその白い白衣に飽きていました。看護婦になるずっと前から。自分がまだ子どもで看護婦さんにお世話をしてもらってたときから。「いつもいつもおんなじ白くてござっぱりした白衣なんて着ていたくないわ。みんな一緒に、型抜きされたおにぎりみたい。あーつまんないつまんない。なんで汚れやすい白なんて着ていなきゃいけないのよ。仕事してると汚れるのよ。まったく。それに白衣の天使とか言うけど、看護婦だって人間なのよ。悪魔になるときもあるわ。患者さんに対してむかついたり、どうしようもなく悲しくなって、消えたくなくなってしまいたいときもあるわ。ぶんぶん。白衣を着るといつも笑顔で可憐で愛らしく天使でいなきゃならないみたいじゃない。窮屈だわ。」

そこで看護婦さんは白い白衣を着るのをやめようと思いました。「色つきがいいわね。汚れも目立たなくなるし何色がいいかしら。うーん、あたしっほくピンクとかいいかしら。」看護婦さんは次の日からピンクの白衣を着ることにしました。「ということは白衣じゃなくてピンク衣になっちゃうわ。」看護婦さんはそれを来て仕事をしたらいつもより仕事がかどった気がしました。「やっぱりピンクが好きだからかしら。でも少し目立つわね。ドクターや同僚の目も冷たいわ。患者さんも驚いた顔してたし。わたし変なのかしら。小さい子どもにも『あの看護婦さんピンクーッ。』て指差されて叫ばれたわ!!そしたらその子のママが『誰かに指差しちゃだめーッ。』って叫んでたわ。なんて不憫。フピン。ふびん。ん??ピンクの白衣可愛いのに。その子どもも可愛かったのに。だめなのかしら。まあ。」看護婦さんは少し落ち込みました。そのあと結構憂鬱になりました。周囲の目は冷たいし、自分の個性を否定された気分になりました。「何がだめなのかしら。そうねえ、やっぱりピンクがいけなかったのかしら。みんな白のが好きなのかしら。きっとわたしだけ目立ちすぎてみんな嫉妬したのね。まあ!!」

そこで看護婦さんは次の日からまた白い白衣を着ることにしました。そうしたら久しぶりに白い白衣を着たのでそれが新鮮で少しうれしくなりました。それなので、看護婦さんはまたしばらくこの白い白衣を着ることにしました。しばらくその白衣を着て仕事をしたのでした。そしたらまた飽き始めました。「やっぱり飽きちゃうのよねえ。悪くないのよ。シンプルで。白で可愛いし。コスプレっほいし。コスプレって何だ?でも何かつまらないわねえ。良くもなく悪くもなくて感じかしら。もと自分に似合っていてわりとシンプルで可愛らしいデザインないかしら。自分らしい白衣をオーダーメイドしようかしら。仕立屋のグロースターさんに頼もうかしら。でもあのおじさん愛想が悪いのよね。オーダーメイドはお金もかかるし。やっぱりやめるわ。そんなことしても無駄なもの。みんなに冷たい目で見られるものちょっと嫌だし……あーでももうあの白衣には飽きたの。どうしましょう。」

そのとき、患者さんのおばあさんに「看護婦さんって、清潔なイメージで白い白衣なんだろうけど、べつに違う色でもいいわね。きっと個性も大切よ。」と言われました。「そうですね!!女性はおしゃれするとドキドキワクワクして楽しい気持ちになる人が多いと思うし、仕事大変だし、かわいい白衣なら気分も明るくなりそう。」するとおばあさんは「そうね。おしゃれすることは、自己表現のひとつだし、存在の確認作業的なところもあると思うわ。あなたらしい白衣を着ればいいと思うわよ。」と言いました。

そこで看護婦さんは自分で白衣を作ることにしました。ワクワクしながら、生地も糸もボタンも自分で手芸屋さんに買いに行きました。看護婦さんは三日連続で寝ないで白衣を仕立てあげました。そうしたら!なんとっ!!なんとっ!!!いつも着ている白衣と大して変わりませんでした。あー残念。「まあしょうがないわね。自分で作ってこれじゃあしょうがないわ。でも満足したわ、なぜか。きっとあたしこのデザインが結局気に入ってるのね。明日からはいつもの白衣とこの作った白衣2着あるわけだし、お洗濯も楽ね。ふう。疲れた。看護婦やめてアパレルの仕事に転職しようかしら。冗談よ。フフフフッ?」すると小さな子どもが彼女を指さして、「ママあの看護婦さんコワイ。一人で笑ってるよ。」するとその子のママが「まあ。なんて不憫なのかしら。フピン。ふびん……。きゃ?」と言いました。「おとなって気持ち悪いなあ変だなあ。」小さな子どもが言いました。その子はマイケルと言いました。とっぴんばらりのぶう。

物語9「自分色」

小林裕美作、佐藤優香 加筆

むかしむかしあったとさ。私にとっては昔の話。私は、小学生だった。習い事して、塾にも通って、親の前ではいい娘。親は、私の前では無関心。周りの目ばかり気にして、大人って嫌だなんて思ってた。塾の帰りに駅のホームでベンチに座って電車を待っていたら、若い男の人が話しかけてきた。

「いつもこの時間帯に駅使うの？」

「はい。」

「バイトしない？この袋の中にある封筒を1枚ずつこのベンチの裏に貼り付けるだけでいいんだ。」

「いくらもらえるの？」

「1万円。」

私は、あぶないものなんだろうと思ったけれど、面白そうと思い、引き受けてしまった。封筒の中身は麻薬で、小学生の私は、中身は何かわからないがあぶない物だろうとわかっていながら、好奇心やスリルと1万円に満足して、ベンチに封筒を貼り付けていった。

ある日、ベンチに封筒を貼り付けていると、隣におばあさんが座ってきた。私は、バシたかなとドキドキしていた。しかし、おばあさんは塾の名前の入ったかばんを見て

「勉強頑張ってるね。」と話かけてきて、封筒には気づかなかったようだ。

おばあさんは「こんな時間まで勉強頑張ってるね。きっと自慢の娘さんね。」と言った。

「そんなことはないです。親は、私にあまり興味ないんです。」と言うと、

「それは、興味が無いんじゃないかと、興味のありかたが少し違うのかもね。」とやさしい顔で言った。私は、納得した気持ちと、淋しいような気持ちがした。そんな私の顔を見て、

「自分側からだけでなく、相手側から考えたり、相手を信じることでわかり合えたり、自分を大事にできるのよ。」と言った。

なんだか説教っぽいなと思いつつも、おばあさんには自分のことを少し話してもいいなと思えた。それから、駅のホームで会うたびに話をするようになり、その日あったことや、相談などいろいろな話をするようになった。おばあさんと仲良くなるうちに、おばあさんに封筒を貼るバイトをしているような自分を知られたくないと思うようになり、バイトを辞めなきゃと考えるようになった。残りの封筒を貼り終え、その後バイトはしなかった。おばあさんと仲良くなるうちに、いい娘を演じることもなくなり、自然な自分でいられるようになった。そして、私は今、中学3年生である。

今は、中学3年生の夏休み。夏期講習の後におばあさんに会いに行くのが、私の日課になっていた。家族のこと、塾のこと、進路の相談、話すことはいろいろある。ある日おばあさんの家を訪ねると、おばあさんの声がしない。家の中に入ってみると、おばあさんは倒れていた。私は、はっとして、おばあさんの顔をのぞき込む。見ただけでもう息をしていないのがわかった。胸の中に穴が開いたみたい。空虚感におそわれた。まだいかないで。もっと一緒にいたい。そんなことばかり考えて、不安でしかたなかった。夏期講習も休みがちになり、おばあさんからの愛をもらえなくなったらどうすればいいのかわからなかった。

そんなとき、普段あまり話しをしない母から「あのおばあさんは、自分の人生をめいっぱい生きたの

よ。だから、あなたも頑張らないと。」と言われた。それを聞いて、なにかに気づいた。おばあさんがいなくなってしまったのは、すごく心細くて不安だ。だけど、それは結局自分の問題なんだ。おばあさんが今まで与えてくれた愛は失われるわけではない。自分も頑張ろうと思えてきた。それから、夏期講習にもしっかり通うようになり、不安などに左右されずに、前に向かって頑張れるようになった。

夏期講習も終わりに近づいた頃、塾の帰りにベンチに座っていたら、またあの若い男の人に話しかけられた。

「また、バイトしてくれない？今回は2万で！」

今回も封筒を貼り付けるらしい、結局、お金につられてやってしまった。でも、今回の封筒は悪いものではなさそうだった。その封筒からは、甘い匂いがしていた。しかし、中を見るわけにはいかなかった。

ある日、ベンチに封筒を貼り付けていると、誰かがいる気配を感じた、後ろを振り返っても誰もいない。こんな日が、1週間続いた。そしてまたある日、誰かがいる気配がして、振り返ると、あの若い男の人がいた。その若い男の人は、淡々と話し始めた。

「実は、君に張り付けてもらっていた中身は、麻薬にみせかけた、こんべいとうなんだ。」

「え？」「は？」私は2度も言ってしまった。

「実は君が会っていたおばあさんは、俺の母親なんだ。」

私は、全く意味がわからなくなって、その場から逃げた。でも、若い男は後を追ってきた。私はあきらめて、話を聞いた。

「実は、俺が最初に君とあった時、もう俺は死んでいたのだ。」

「俺が君と同じくらいの年、駅のホームで死んでから、母親はふさぎこんでしまっていた。」

「でも、母に元気になって欲しいと思っていた。何かできないか考えていた。そこに君が現れた。」

「俺は考えたんだ、どうやったら母の笑顔を見れるのか。」

「だから君に、封筒を貼り付けてもらって、母と会うように細工したのさ。」

「君に会うようになって、母の笑顔を見れることがとても嬉しかった。」

「母と話していくうちに、君も母も変化していくのが、空からみてわかった。」

「困惑させてゴメンネ。」という目の中から砂のように若い男は消えた。一瞬の出来事だった。しかし、いつの間にか、右手を握りしめていた。開いてみると、一粒のこんべいとうが手から落ちて行った。

この出来事があってからというもの、この駅のホームには不思議な言い伝えができた。「こんべいとうが空から降ってくる」という。

私は、この出来事で前向きに過ごせるようになった。自分に自信がもてるようになった。家族とも、いっぱい話すようになった。自分らしくいられるようになった。これは、神様が私を変えるために、与えてくれたチャンスだったのかも知れない。

たとえ、幻だったとしても。